

第10回国際サンゴ礁シンポジウム (沖縄)と阿嘉島科学巡検

岩尾 研二
阿嘉島臨海研究所

Report on the 10th International Coral Reef Symposium and the scientific excursion
“Nature in Akajima”

K. Iwao

●第10回国際サンゴ礁シンポジウム

2004年6月27日、那覇市泊のかりゆしアーバンリゾート那覇のワンフロアは、翌6月28日から7月2日までの5日間にわたって宜野湾市の沖縄コンベンションセンターで開催される第10回国際サンゴ礁シンポジウムの参加登録で賑わっていました。この空間だけ、日本から切り離されたように、海外の研究者でひしめき合い、外国の言葉が飛び交っていました。慣れた道をいつものように歩いて来たのに、突然出会った非日常的な光景に不思議な気分を覚えながら、やっぱり国際学会なんだな、と期待が高まるのを感じていました。

前回のバリでの第9回大会で、日本でのシンポジウム開催が決まってから、「日本は物価が高くて、旅費もかかるから、思ったほど参加者は多くないのではないか」という噂もありましたが、結局世界87の国と地域から1420名もの人々が参加し、発表数も、口頭発表が770件、ポスター発表が611件の合計1381件で、過去最高だったバリ大会とほぼ同じ規模になりました。実施されたセッション数は、59にのぼり（特別セッションを含む）、ポスター発表の行われたエキジビションホールを含めると10部屋が発表に使用されました。この59のセッションは5つのテーマに分けられていましたが、もっとも多くのセッションを含んでいたのは「人間とサンゴ礁の共存システムに向けて」と題されたテーマで、研究者の現状に対する危機感と保全に対する関心の高さを感じました。

阿嘉島臨海研究所からは、保坂三郎理事長、大森信所長、谷口洋基研究員と私の4名が参加しました。保坂理事長はシンポジウムの国内組織委員を務められ、大会中はエキジビションホールにAMSLのブースを設けられました。大森所長は、国際および国内組織委員、“Coral Reef Restoration and Remediation”セッ



エキジビションホールでのポスター発表

ションのコンピナーと司会者、さらに、公開シンポジウム“人々とサンゴ礁－東南アジア・沖縄からのメッセージ”の第2部“慶良間列島－沖縄のサンゴ礁保全に向けて”の司会者と、たくさんの役目を務められ、大活躍でした。また、谷口研究員は、「The coral reef management in Zamami Village, Okinawa」を口頭発表、「The Nursery production of reef building coral」をポスター発表し、私は、「Enhancement of production of coral larvae under suitable conditions of temperature and salinity, and technique for their transplantation」をポスター発表し、前出の公開シンポジウムにおいて「残されたサンゴ礁－慶良間列島、その美しさ」を報告しました。発表の緊張感はありませんでしたが、シンポジウムの間、Aileen Morse 博士、Yossi Loya 博士、Andrew Heyward 博士、Andrew Baird 博士、その他多くの方と再会でき、またそれらの方々に知り合いの研究者の方を紹介してもらったりして、サンゴの分類や幼生の着生、刺胞動物の生態、世界のさんご礁の現状など、いろいろな話を聞くことができ、好奇心の高まる期間でした。こうした機会を与えて頂いた保坂理事長と大森所長に深く感謝

いたします。

大会の締めくくりに「沖縄宣言」が採択されました。そこには、さんご礁の危機的状況を再確認するとともに、「その保全・再生が遅滞なく行われなければならない」と謳われています。そして、その実行は、国際的連携の下で、科学者・為政者・市民など、立場の違う人々が参加し、連携しながら進められなければならないと述べられています。私は、“連携”のためには、さんご礁の価値、言葉をかえると、さんご礁の存在がそれぞれの立場の人にとってどんな「得」になるかが明確に認識されることが、大切ではないかと思っています。それによって「守らなければ」という気持ちがはっきりしてくるのではないのでしょうか。「沖縄宣言」を聞きながら、そんなことを考えていました。

次回第11回大会は、2008年にアメリカ フロリダ州のフォート・ローダーデールで開催されることに決まりました。どんな大会になるのか、また楽しみです。

●阿嘉島科学巡検 “Nature in Akajima”

7月3日11時50分、波のために少し遅れたフェリー一ざまみに乗って、巡検参加者が阿嘉島にやってきました。いよいよ始まりです。正規参加者は、8カ国から28人、ただし2歳の男の子がいるので正確には29人で、そのうち28人が外国人です。もしかしたら、この小さな島にこれだけの数の外国人がま

とまってやってきたのは、第二次世界大戦末期の米軍上陸以来かもしれません。ただし、今回はみんなこの上なく友好的です。



歓迎レセプションのあと

大森所長をトリップリーダーとして、この阿嘉島巡検の準備が始まったのは、1年以上前のことでした。仲村三雄座間味村長をはじめ、村のたくさんの人に協力をお願いし、3泊4日のスケジュールを作り上げたのも7カ月前の話です。それでも、台風はやってくるもので、阿嘉島の西側を台風7号が北上していました。ずいぶん遠いところだったのですが、波が高く定期船は欠航寸前で、参加者はなんとか島に渡ってきたのでした。けれども、特に日程の前半は、空は雲で覆われ海は時化て、思うようにダイビングができず、最終的に実施したスケジュールは次のようになりました。



AMSLのレストランにて



阿嘉中学校生徒によるエイサー

1日目 (7月3日)

- 10:00 那覇泊港をフェリーざまみで出発
- 11:50 阿嘉島到着
- 13:30 島内観光(ニシハマビーチと天城展望台)と阿嘉島臨海研究所視察
- 18:00 座間味村による歓迎レセプション

2日目 (7月4日)

- 10:00 ニシハマビーチと中岳展望台散策
- 14:00 クシバル礁池内にてスノーケリング
- 21:00 ケラマジカ観察

3日目 (7月5日)

- 10:00 嘉比島にてダイビングとスノーケリング、または島内散策(阿嘉部落とヒズシ)
- 14:00 嘉比島にてダイビングとスノーケリング
- 19:30 阿嘉島臨海研究所によるフェアウェルパーティー

4日目 (7月6日)

- 9:00 ニシハマにてダイビングとスノーケリング
- 16:30 フェリーざまみで泊港へ

1日目の歓迎レセプションは、仲村村長をはじめ座間味村役場、特にむらおこし課の皆さんのご尽力によって実現することができました。仲村村長と大森所長の挨拶で始まり、くじら太鼓や阿嘉小中学校の生徒たちによるエイサーの演奏には、参加者のみんなが大喜びでした。阿嘉島だけでなく、慶留間島、座間味島の人たちもやってきて楽しい会になりました。

ダイビングとスノーケリングには、あか・げるまダイビング協会の皆さんが全面的に協力してくれました。海況の悪い中、安全でサンゴの豊かな場所を選んで案内してもらいました。大西洋・カリブ海のさんご礁を見慣れた参加者は、その美しさにとっても驚いていたようです。さすがは研究者で、中にはさんご礁を楽しむだけでなく、どんなサンゴが生息しているか盛んにデータを取っている人もいました。

2日目には、ホテルのロビーに七夕飾りをしました。島の人が採ってきてくれた笹に、島の子供たちが作



ニシハマにてビーチを散策



中岳展望台散策



クシバル礁池内にてスノーケリング



阿嘉中学校生徒と一緒に島内散策



慶良間のさんご礁を潜る参加者

るのを手伝ってくれた折り紙などを飾りつけました。参加者は皆、興味津々で、七夕の話をする、全員が短冊に願い事を書いてくれました。

島内散策のガイドは、金城忠信さんが快く引き受けてくださいました。忠信さんは、元英語教師だけあって、にこやかに巡検参加者と会話されていました。昔の島の自然にも詳しく、今回のガイドにはうってつけだったと思います。

明日はもう阿嘉島を離れるという3日目の夜、居酒屋白鯨でフェアウェルパーティーを開きました。研究所に来ていた Yehuda Benayahu 博士達も参加し、島の魚の刺身をつつきました。やっぱりタコはなじみがないらしく、食べるか食べるまいか、迷っている人もいましたが、カツオは好評だったようです。

小さな島とは言え、移動には車が必要になります。今回の巡検の全期間を通して、(株)21ざまみとホテルシードルンからは、マイクロバスやワゴン車を無償で提供してもらい、しかも運転までやってもらいました。おかげで、ニシハマからクシバルまで、参加者たちは島中を見て回ることができました。

それから、参加者の細かなサポートには、服田昌之さん、大久保奈弥さん、横川雅恵さんがボランティアで協力してくれました。阿嘉島の自然をたくさん見てもらいたいと欲張りな計画を立てたので、サポートするほうは海に山にと大変だったと思います。

帰りのフェリーを見送るときは雨が降っていました。



ダイビングの後、船上にて

とうとう最後まで、天気は回復せずじまいでした。明るい日差しに照らされて、さまざまな青色に輝く海と、その中で生き生きと色づく生き物達を見てもらえなかったのは本当に残念でした。けれども、参加者の皆さんは、とても喜んでくれたようで、別れ際にも、その後のメールでもたくさんのお礼をもらいました。また来たいと言っている人もたくさんいます。きっと阿嘉島の自然の豊かさや、その自然とつき合う島の人達の姿勢に好感を持ってもらえたのだと思います。ですから、この巡検は大成功だったと言えるでしょう。その成功は、ここに記した方々、その他の島の人々のご協力のおかげです。末文ながら、あらためて、感謝申し上げます。